

IFRS 財団カンファレンス フランクフルト

2012年6月27日

ここフランクフルトでのこの重要なイベントに参加できて非常に光栄です。私が IFRS 財団の評議員会の議長に選任されるという名誉を受けた 6 か月後に、IFRS 財団の最近及び将来の動向に関して皆様に最新情報を提供できる機会をいただき嬉しく思います。

私は、意識的に「名誉」という言葉を使っています。何人かの非常に優れた人たちの後任を務めているのは幸運なことだからです。その中には、Paul Volcker や、私の良き友でしたが残念ながら 2010 年の暮れに他界された Tommaso Padoa Schioppa がいます。

ご存じかと思いますが、評議員会はこの組織のガバナンスと IASB の監督の責任を負っています。特に、責任を負っているのは、戦略の設計、この組織の資金及び資源の提供、そして、最も重要なこととして、IASB の基準設定活動がオープンで包括的で徹底的な堅牢なデュー・プロセスに従うことを確保しつつ、その専門的な独立性を保護することである。

私の同僚の評議員には、世界中からの、元財務大臣、中央銀行総裁、企業の経営幹部、証券コミッショナー及び学識者がいて、全員が財団の目標への責務を共有して団結しています。私の友人であり同僚の評議員である Clemens Börsig が私の後にお話する予定なのは喜ばしいことです。

フランスの証券規制機関であるフランス金融市場庁 (AMF) の元長官、また、証券監督者国際機構 (IOSCO) の元議長として、私自身、2000 年 5 月の当組織の設立に関与しました。それは IOSCO が、IASB の非常勤の前身である国際会計基準委員会が作成した国際会計基準 (IAS) のコアセットをエンドース (承認) した時でした。私は、初代の評議員会を選出した委員会の委員を務めました。現在の評議員グループの議長として戻ることは、思いがけないことではありますが、大変やりがいのあることでもあります。

グローバル会計基準への道筋

私たちが 10 年以上前に会計と財務報告に関するグローバル基準への道筋を示した時には、その後の 10 年で達成された成功のレベルは想像できませんでした。当時、国際的な会計基準を使用していた主要経済国はありませんでした。実際に、当時は、国際的に認められる高品質な会計基準を使用したいと思えば、US GAAP しか選択の余地がありませんでした。

しかし、金融市場はグローバルに相互関連したものであるため、財務報告に対する国内的なアプローチはもはや適切とは考えられなくなっていました。

当財団の初代議長の Paul Volcker が、よくこんなことを言っていました。「国際的な会計基準は必要だが、コネチカット (訳注: FASB の所在地) で作成するわけにはいかない。」

分散化や成長を求める投資者は、投資の機会を同じベースで比較対照することを望んでいました。多国籍企業は、多数の各国内の報告要求の負担をなくすことを望み、世界中どこでも資本を調達する自由を求めています。同時に、証券規制当局者として、私たちは、国内の投資者の保護という頭痛の種を認識していました。投資者が国際的に投資をし、彼らが扱わなければならない基準に相違があり時には矛盾している場合に生じる問題です。

実際に、いくつかの事象が同時に生じて、この戦略の目的適合性を確認し、IASB の作業を加速させ、グローバルな金融システムにとっての重要性を強調するものとなりました。

第一に、欧州全域の会計基準のセットを開発するという数十年にわたる試みの失敗の後、欧州は 2002 年に、進路を変更して、2005 年から規制対象市場に上場する企業の連結決算書について、羽が生えたばかりの IAS（現在は国際財務報告基準あるいは IFRS と呼ばれています）を採用することを決定しました。一夜にして、これが IASB を変容させました。興味深くはあるがいささか正体不明な会計シンクタンクから、ヨーロッパの会計基準設定主体に変貌したのです。

第二に、米国で一連の会計スキャンダルにより US GAAP の無謬性に疑問が生じ、これにより米国財務会計基準審議会（FASB）が基準の根本的な刷新を検討することとなりました。IASB と FASB にとって、2002 年のノーウォーク合意により IFRS と US GAAP を並行して刷新することは全く理にかなったことでした。そのため、それぞれの基準を改善してコンバージェンスをもたらす 10 年間の作業が始まったのです。

第三に、新興経済圏が経験した急速な成長により、それらの各国も、高品質で国際的に認められる財務報告基準が必要となりました。これらの国々の多くは、十分に発展した資本市場があり、主要な多国籍企業の本拠地となっています。その大部分は、独自のグローバル金融センターを発展させるという野心を持っていて、IFRS の使用がこうした金融センターが存在するための前提条件と見られることが多くなってきています。

最後に、2007 年に始まり現在も続いているグローバルな金融危機がはっきりと示したことは、金融市場はグローバルに結び付いたものであり、高品質でグローバルな会計基準の単一セットが緊急に必要なということです。これこそが、G20 コミュニケ（ロスカボスでの最近の G20 サミットで公表されたものを含めて）が繰り返し IASB の作業を支持し、グローバルな会計基準への早急な動きを求めている理由です。

最近 10 年間の成果のおかげで、IFRS はこのようなグローバルな基準となるための道を着実に進んでいます。

現在、100 以上の国々の企業に、IFRS の使用が要求されるかまたは認められています。今年からは、G20 メンバー国の 3 分の 2 以上で IFRS の使用が要求されています。これには、最近 2 年間の、ブラジル、カナダ、韓国、メキシコ、ロシアが含まれています。Global

Fortune 500 社のほぼ半数が、現在は IFRS を使用して報告を行っています。

IFRS をまだ全面的に採用していない残りの国々では、引き続き大幅な進展が見られます。

私は最近、中国と日本を訪問し、IFRS アドプションへ向けての両国の準備状況について理解を深めました。

中国はすでに自らの財務報告基準を大幅に刷新しました。「継続的なコンバージェンス・プロセス」と呼ばれるものを通じてのことですが、中国ではこれを組み込みのプロセスと理解していて、それらの基準と IFRS との間の相違は、現在では非常に小さいように見えます。IFRS への中国のコミットメントは非常に印象的なものであり、1 千 4 百万人の会計士がいる国が IFRS への全面移行の完了に若干の時間を要する理由を理解するのは容易です。また、中国は当組織に積極的に関与していて、すでに IASB の新興経済国グループの事務局職員を提供しています。中国が IFRS の将来の開発に十分な役割を果たすことは間違いありません。

日本にしばらく滞在し、いろいろな関係者とお会いできたことも幸いでした。

同じように、日本の IFRS への長期的なコミットメントも疑いないものと考えています。日本は IFRS 財団の業務を支援し続けてきました。また、基準設定プロセス全体にわたって IASB と非常に緊密に協力して作業を行っています。

日本はすでに、国内の企業に IFRS の任意適用を認めています。IFRS を使用して報告することを選択する日本企業の数は、今後数年間で急速に増加すると予想されます。IFRS への移行を日本が正式に決定するかどうかを問わず、その基準を使用する大手の国際重視の日本企業があれば、IFRS の事実上のアドプションをしていることとなります。

今年の後半に、私はインドを訪問する予定です。評議員会は、IFRS への移行においてインドの同僚を支援する準備ができています。

また、今年の後半に、IFRS 財団はアジア・オセアニアのリエゾン・オフィスを東京に開設します。ロンドン以外での最初のオフィスは、私たちの願いを明確に示すものです。それは、アジア・オセアニア地域の国々の IFRS への移行を支援するとともに、すでに基準を採用した国々を支援したいという願いです。

最後ですが重要なこととして、最も待望されている決定の一つは、米国が自らの財務報告制度に IFRS を組み込むかどうか、また、どのように行うのかです。IASB と FASB は、ノーウォーク合意以来、10 年かけて、献身的で有意義なコンバージェンスの取組みを通じてこの決定の基礎作りをしてきました。この作業を認識して、2007 年に、米国証券取引委員会 (SEC) は、米国で上場している外国企業が IFRS を使用して報告することを認め、国内の企業についても IFRS を採用する可能性に関して協議を開始しました。現在、SEC は、IFRS を使用して報告する米国市場に上場している 100 以上の企業を監督しています。

私たちは、IFRS アドプションへの進路に関する SEC の最終のスタッフ・レポートを興味深く待っており、SEC の審議への前向きな結果を期待しています。

これは、この 10 年強にわたる本当にすばらしい進展です。このカンファレンスの残りの部分で、皆様には、この組織が直面している多くの課題についてお話しする予定です。その課題の中には、残っているコンバージェンス・プロジェクトの完了や、残っている法域に全面的な採用を促すための私たちの作業などがあります。こうした課題について認識しつつ、ここまでお話ししてきたこの素晴らしい進展を忘れないようにお願いします。歴史的なトレンドに沿って、コップははっきりと半分以上満たされています。

グローバルな会計基準設定主体になること

それでは、IFRS 財団にはどのような将来が待っているのでしょうか。最近 10 年間の成果をどのように統合するのでしょうか。国際的な財務報告基準から真にグローバルな財務報告基準への移行を支援するために、どのようなステップを踏む必要があるのでしょうか。また、IASB がグローバルに認知された会計基準設定主体となるためには、どのようなステップを踏む必要があるのでしょうか。

2010 年に、評議員会は、IFRS 財団のモニタリング・ボード（評議員会の報告先です）とともに、それぞれ独立ですが連携したレビューの実施により、これらの質問への回答に着手しました。

モニタリング・ボードは、公的機関の集まりであり、政策上の正当性及び説明責任を私たちの組織に与えています。モニタリング・ボードは、IFRS 財団のガバナンスの制度的側面への対処に着手しました。その中には、IFRS 財団自身の構成とともに、当組織の 3 つの層、すなわち、IASB、評議員会、モニタリング・ボードの間の関係が含まれています。この 3 層は、現在、広く受け入れられている構造の基礎となっています。

評議員会は、広範囲に及ぶ戦略レビューを開始し、その中で IFRS 財団の使命、基準設定プロセス、ガバナンス及び資金調達について検討しました。

モニタリング・ボードと評議員会の両者とも幅広く協議を行い、2012 年 2 月に、私たちはそれぞれの調査の結論を共同で公表しました。

こうした冒頭あいさつでは、24 ページのモニタリング・ボードのガバナンス・レビューや 25 ページの評議員会の戦略レビューについて述べる十分な時間はありません。

財務報告の将来の方向性に関心をお持ちであれば、これらの報告書をウェブサイトからダウンロードすることを強くお勧めします。今後数年間の私たちのそれぞれの活動を示したものとなっているからです。

しかし、評議員会の戦略レビューにおける 3 つの最も重要な結論と私が考えているものをお示ししたいと思います。

第一に、私たちが受け取ったフィードバックから、IFRS の開発方法の効率性に改善の余地があることは明らかでした。最近数年間にわたり、評議員会は、IASB のテクニカル・スタッフの人数の大幅な増加を目撃してきました。同時に、これに対応した IASB の協議やアウトリーチ活動の幅や深さの拡大も見てきました。

しかし、IASB がグローバルな会計基準設定主体となるために順応する中で、一つの組織ではこれを単独で行えないということも認識しなければなりません。

基準設定は長年にわたり共同作業でした。最近開発された多くの基準の品質と強固さに大いに恩恵を与えているのは、基準設定プロセス全体にわたって IASB に助言やガイダンスを提供する多くの組織や個人です。おそらく、この最も良い例は、国際的な基準設定主体としての IASB と、会計基準設定に関心のある各国・各地域の組織との相互関係です。

国内レベルでは、IASB は引き続き、FASB、企業会計基準委員会 (ASBJ) や、他の多くの国内基準設定機関 (欧州各国にあるものなど) と緊密に協力して作業をしています。

同時に、私たちは、基準設定に関心のある他の地域的機関の出現も目撃してきました。

この中には、欧州財務報告諮問グループ (EFRAG) のように、十分な資源を持った組織がありますが、アジア・オセアニア会計基準設定主体グループ (AOSSG) やラテンアメリカ会計基準設定主体グループ (GLASS) など、やや非公式な地域グループもあります。

こうした各国・各地域の機関のそれぞれが、IASB の基準設定活動に大きく貢献してきました。評議員会の戦略レビューと、FASB とのコンバージェンス・プログラムの完了は、IASB と各国・各地域の機関との間の将来の関係をさらに検討する機会となります。

評議員会の戦略レビューでは、これらのグループと協力する新しい方法を予見しています。IASB が世界中の基準設定コミュニティともっと組織化された公式な関係を確立し、これらの機関が基準設定プロセスの早期の段階で関与することを求めています。これによる便益は、世界的な視点が基準設定のプロセスの中により適切に組み込まれることになり、新基準がエンドースされないリスクがおそらくは減少することです。

このレビューは、これらの組織の活動を IASB の公式な基準設定プロセスの中にさらに十分に組み込むための考え得る方法も記述しています。この作業は、最近エクゼクティブ・ディレクターに就任した Yael Almog の主導により進行中で、私たちは今後数か月以内にその詳細の議論を開始する予定です。

第二に、評議員会の戦略レビューでは、グローバルな会計基準という目標は、基準のエ

ンドースや執行がグローバルに首尾一貫して行われなかった場合には、幻となることを認識しています。これは、すべての人々が同じ基準のセットを採用し、それらの基準が同じ方法で適用されるということです。

IASBは規制機関ではなく、執行する立場にはありません。また、基準の順守を監視するための資源も専門能力もありません。ありがたいことに、既存の組織として証券監督者国際機構（IOSCO）があり、投資者保護と財務情報の品質を扱っています。

IOSCOは、最近、その指導陣と運営活動の再構築を完了したところです。IOSCO理事会及び専門委員会の元議長として、私がよく知っている組織ですが、グローバルな会計基準の適用状況の監視に主導的な役割を果たすことができます。

私たちは、どのように協力を深めることができるのかに関してIOSCOとの議論をすでに開始しました。先月、Yaelと私は、北京を訪れて、IOSCOの年次大会に出席しました。IOSCOボードの議長に新たに就任した河野正道氏は、IFRS財団モニタリング・ボードの議長も務めています。テクニカルなレベルでは、IOSCOの新しい会計・監査・財務報告に関する方針委員会が、基準の首尾一貫した適用の検討においてIASBと緊密に協力するのに適切な立場にいます。IOSCOネットワークは、IFRSが世界のさまざまな地域でどのように機能しているのかに関して、極めて貴重な実務上のインプットを提供するのに適切な立場にあり、これは、IFRS解釈指針委員会の作業と、主要な新基準についてのIASBの適用後レビューに便益を与えるものとなります。

これを推進するための素晴らしい機会があります。私は、IOSCOとの非常に成功している継続中のパートナーシップに大いに期待しています。

最後に、評議員会の戦略レビューでは、IASBの基準設定プロセスについて一連のより一層の強化策を提言しました。これらの強化策は、すでに立派であるデュー・プロセスを基礎としており、次のようなことに関する提言が含まれています。IASBのアジェンダ設定プロセスの透明性、フィールド・ビジット及び影響分析についての合意された方法論の開発、評議員会のデュー・プロセス監督委員会（DPOC）を通じたデュー・プロセスの監督の厳格性の強化などです。

評議員会はすでに、これらの提言を実行に移し始めています。例えば、先月、David Lowethを評議員会活動ディレクターの役職に任命しました。英国会計基準審議会（ASB）のテクニカル・ディレクターを務めていた人です。

Davidの任命により、DPOCが独自の専任の資源を得ることとなり、評議員会の監督とIASBの作業との区別が一層強化されます。

戦略レビューの主要な発見事項のうち3つを説明しました。評議員会は、両方のレビュー

一の提言のすべての完全実施に取り組んでいます。私たちは、「IASB デュー・プロセス・ハンドブック」の改訂版をすでに公表して、一般のコメントを求めており、IFRS 財団定款の改訂もまもなく公表の予定です。

結び

皆様、与えられた短い時間の中で、我々が相当な進展を続けていることを報告できて嬉しく思います。IFRS 財団の年次報告書は、私が本日触れた内容についてさらに詳細な説明を提供しています。

評議員として、私が専門的事項を扱うことは想定されていませんが、同僚の評議員と同様に、IASB が対処しなければならない困難な問題や、グローバル基準を設計する際に世界的に生じている半ば哲学的な議論について十分に認識しています。

数日前に、IASB の議長であり元証券規制当局者である Hans Hoogervorst が、アムステルダムでスピーチをし、この課題に触れました。このスピーチをウェブサイトでお読みになるようお勧めします。彼の言葉は、会計及び財務報告の基本的な目的と本来的な複雑性を私たちに思い出させるものです。その基本的な目的とは、基礎データへの直接のアクセスを有していない市場参加者に対し、彼らが投資又は取引をする企業の状況と業績についての真実かつ公正な表示を提供することです。

これは困難な職務であり、価値の相対性のルールを扱うとともにさまざまな見解や事業モデルに向き合わなければなりません。

ガバナンス及び戦略のレビューは、10 年間の成果を基礎としたもので、次のような進路を示しています。IFRS 財団がこれらの複雑性に十分な透明性をもってすべての関係者と協力して対処するための進路と、IASB が真のグローバルな会計基準設定主体として認識されるための進路です。

会計基準設定に関心のある各国・各地域の機関と IASB の関係を正式のものとするにより、私たちの作業の有効性が高まります。IOSCO や他の国際的な組織との関係の強化を通じて、私たちの基準の適用に焦点を当てることは、我々が真にグローバルな会計基準という目標を達成するのに役立つことでしょう。さらに、IASB のデュー・プロセスへの強化は、基準設定プロセスへの信認をさらに高め、基準の堅牢さを向上させることでしょう。

ご静聴ありがとうございました。会議の成功をお祈りします。